

# FLORA KANAGAWA

神奈川県植物誌調査会ニュース 第16号

JUL. 15. 1984

231 横浜市中区南仲通 5-60 神奈川県立博物館内

神奈川県植物誌調査会 振替口座 横浜3-10195

TEL. 045-201-0926

No. 16



群生するエビラシダ

エビラシダ(別名ジクオレシダ)は大山がタイプ産地で、種名のoyamenseはこれに因んでいる。

群馬県以南の本州と四国に分布し、本県では丹沢、大山、箱根に自生する。現在ではこの写真のような群生は稀である。

(守矢淳一)

## 湘南地区のシダ植物

湘南ブロック担当地区のシダについて、これまで調査したことについてまとめてみました。

この地区は、北は丹沢・大山の連山の頂を境に、南面の山地から南は相模湾まで、東はローム層から出ている相模台地から江ノ島にかけ、西は酒匂川左岸の平野に及んでいます。中央は相模川の沖積層から出ている相模平野の中心を占め、その西には丹沢山塊の余勢をかった大磯丘陵が相模湾まで達しています。

北部の山地には1000-1500mの山が控えていますので高い所には温帯～亜寒帯性要素のシダが混じり、相模湾沿岸は冬期温暖のため暖地性要素のシダが多い。暖地～

亜熱帯性要素のものまでかなりたくさんはいり込んでいます。そのためこの地区のシダ植物の種類は多く今までの調査では20科160種類を越えています。これを要素別に分けてみますと次のようになります。

(●印…稀なもの ★印…極めて稀なもの<1~2ヶ所又は2~3株のもの>)

○暖帯～亜熱帯性要素のシダ

★カタヒバ、クラマゴケ、イワヒバ、★コシダ、★ナガバノイタチシダ、★ウラジロ、★アオホラゴケ、ウチワゴケ、★ホソバコケシノブ●コウヤコケシノブ、★ハイホラゴケ、●イワヒメワラビ、タチシノブ、アマクサシダ、●マツザカシダ、ホラシノブ、★ミズワラビ、●オオカナワラビ、●コバノカナワラビ、ホシダ、オニヤブソテツ、ヘラシダ、★ノコギリヘラシダ、●ノコギリ

シダ、イワヘゴ、●ナチシケシダ、ハシゴシダ、★コハシゴシダ

○暖帯性要素のシダ

トウゲシバ、★タチクラマゴケ、イヌドクサ、オオハナワラビ、フユノハナワラビ、カニクサ、★イヌイワガネソウ、フモトシダ、★フモトカグマ、★クジャクフモトシダ、オオバノイノモトソウ、★セフリイノモトソウ、★オオバノハチジョウシダ、★キジノオシダ、★オオキジノオ、ホソバカナワラビ、ハカタシダ、オニカナワラビ、★ホソバイヌワラビ、●ヒロハイヌワラビ、★シケチシダ、●キヨスミヒメワラビ、★メヤブソテツ、ヤブソテツ、ヤマヤブソテツ、★ミヤコヤブソテツ、★ヒカゲワラビ、★ハコネオオクジャク、ベニシダ、★マルバベニシダ、オオベニシダ、★エンシュウベニシダ、★ギフベニシダ、トウゴクシダ、オオイタチシダ、ヒメイタチシダ、オクマワラビ、●エビラシダ、セイタカシケシダ、★ムサシシケシダ★フモトシケシダ、シケシダ、オオヒメワラビ、ゲジゲジシダ、ドウリョウイノデ、アスカイノデ、★チャボイノデ、★オリヅルシダ、アイアスカイノデ、イノデモドキ、オオタニイノデ、★ツヤナシイノデ、ヒメカナワラビ、★オオキヨズミシダ、ヤワラシダ、ヒメワラビ、コモチシダ、コバノヒノキシダ、ミツデウラボシ、マメヅタクリハラン、★デンジソウ、★サンショウモ、オオアカウキクサ

○温帯～亜寒帯性要素のシダ

★オシダ、★イワイタチシダ、●フクロシダ、★サカゲイノデ

○広汎性要素のシダ

★フジハナヤスリ、★コハナヤスリ、ワラビ

○逸出したシダ

★コンテリクラマゴケ、★トクサ、★ホウライシダ

※シダの調査は冬期が最適

調査のまとめの段階にきて、シダの調査法について述べることは遅すぎますが、あと1～2年最後の締めをしたいと思います。

本県のシダは、県内に残された僅かな自然林の中に貴重なものがたくさんありますが、種数も又個体数も一番多いのは植林された杉の林床です。杉植林の適地は湿り気の多い肥沃な土壌ですので、谷川沿いの斜面などが最適地として植林されています。植林して30～50年くらいたてば、下枝は落とされ、上部は樹冠に覆われ大きな湿気に満ちた空間が出来てきて、シダ生育の好場所となって、シダが育ちはじめます。下部の湿潤な場所にはイノデの仲間やリョウメンシダなどの大群生が見られ、続いてベニシダ、オオイタチシダ、クマワラビ、オオバノイノモトソウなどの群落が上部にのびていきます。そしてその間には稀少なシダが点々と見られるようになります。

しかし一番繁茂する夏は、下草や低木の茂みに悩まされて、林下に入りにくいし、シダを見つけることも困難になってきます。場所によっては林まで行くことも出来ないし、毒虫やマムシの心配のある所もあります。ところが冬になりますと、下草も枯れ、林内の見通しもよくなって、シダの発見もたやすくなります。幸いにシダは常緑のものが多く、夏緑のものでも年内であれば多少残るので調査は出来ます。ただこの時期ですと、良い標本を得ることが出来ない場合が多いので、夏になって再びその場所へ行って採り直す必要があります。

私は、初めて調査する場所は、調査の割合ひまな冬の間シダのありそうな場所、特に杉林を探し、その林内を隅ずみまで歩き回って採集すると共に、夏になって入り込めるよう下調べを充分にしておきます。

昨年度より始めた中井町のシダを中心にした調査では今年にはいり1～2月に数回、町内の主要道路から左右の丘陵地の林道に入り込み特に杉林や谷間の崖地の大部分を調べてみました。県内でも分布の少ないキジノオシダ、コバノカナワラビ、オオキヨズミシダ、イワヒメワラビ、ウラジロ、マツザカシダ、オニカナワラビなどを見つけ出すことが出来ました。勝手にわかってきた林内のこの夏の調査を期待しています。

(平塚市 守矢淳一)

## 相武植物調査資料〔2〕

### 7. ヒメバライチゴ

1983年11月13日に奥湯河原の右の谷、浅間神社道で *Rubus* の一品を採ったが、ヒメバライチゴと考えられる本種は安房清澄山、伊豆などにあり、本州中部以西の分布で、神奈川県植物誌や箱根植物目録にも記載されていない。現地には相当多量にあるので、既に採集報告があるかもしれない。新版県植物誌に加えらるべき一種である。付近にはオウギカズラ、イヌガシ、タチネズミガヤ、オオヒメワラビ、カタキノデがある。オオバライチゴも安房や伊豆には記録があり県産の発見が待たれる種と思われる。

### 8. 横浜市緑区のヤブムグラ

県植物誌に本種は「各地」として収録され、具体的な産地名は挙っていない。今回、勝山輝男氏の御努力で横浜市緑区内の池辺町、東方町にその産が判明した。先年(1981年)岩崎五郎先生の御案内で三保市民の森で研修会が開かれたが、大場達之先生の本種ではないかとの示唆で *Galium* 属の一品を採り、栽培を続けているがその後、果実を調べたところ、矢張り本種であった。

### 9. 三浦半島のナガバヤブマオとカタバヤブマオ

三浦半島久留和の滝不動下流にナガバヤブマオがあり本県では山寄りの地域には多いが、珍しいと思われる。この種は本州中部では暖帯林の下に普通であるが、本県では大山など山の斜面で冬期やや寒冷の地に多産することは異例であると考えられる。

三浦の松輪一毘門にはカタバヤブマオの典型品がある。かねてから初山先生、筆者が注目していた一品で矢原先生の同定で本種と判明したが、秋谷などにも本種は見られるので三浦には多産するのであろう。

### 10. メゲヤキ

逗子地方にあり、秋季でも葉の表裏に毛が残り、ピロード状の感触がある。一般に葉裏に立った毛があるとの解説であるが、葉下面の脈に毛があり、葉表面にも毛が残るようである。よく調べれば各地に産すると思う。

### 11. 神奈川県に稀産のコウヤザサ

本誌No. 14で初山先生報告の箱根三国山産のコウヤザサは当日、初山泰一・高橋秀男両先生発見の一品で神奈川県新産である。筆者は数年前、本種の分布を調べるため東大総合研究資料館の標本を一覧したので、この種の関東周辺の産地を参考のため次に列挙しておきたい。

筑波山 (C. Owatari Jul. 15. 1895) 富士山 (早田文蔵 Jul. 28. 1924) 下野国河内郡黒羽村羽黒山 (関本平八 Jul. 20. 1930) 武州高水山 (久内清孝 Sep. 18. 1932) 磐城移岳 (服部保義 Aug. 19. 1935) 上野伊香保 (大井次三郎 Sep. 5. 1950)

本種は近畿、四国、九州に多いようであるが、陸前、信濃、飛騨などの標本も蔵されている。筆者は本種を兵庫県内各地で見えており、岐阜県高山でも採集した。

### 12. カワチハギ

マルバハギの枝に密な立毛が出るもので、かつて丹沢北部、焼山の合同調査の時に採集した。これは認めてよい一品と思う。その後も筆者は中国自動車道赤松PA (兵庫) 付近で採ったことがある。

### 13. アメリカホド

ホドイモ属で帰化品。川崎市生田に出現した標本は県博に提出してある。(leg. Jul. 4. 1982)

### 14. ウラゲワレモコウその後

前回、本品について筆者が本誌に書いたが、原寛先生は植物研究雑誌Vol. 58 No. 2 P. 33 (1983) に東亜植物註解(11)42)の項で本植物について見解を述べられ、従来の変種の扱いから学名上の註解も加えて新たに品種に組み換えられた。

その後、野外で注意しているが、金沢区釜利谷と鎌倉市今泉にて再び見出した。無毛品と隣合って生えていることから、原先生の御考えが至当であると思われる。原先生も逗子市桜山で1928年に採集されているとの由である。

### 15. ピロードクサギ

三浦半島の江奈や松輪付近のクサギは新梢に綿毛(白軟毛)が多く、このような一品をピロードクサギと呼ん

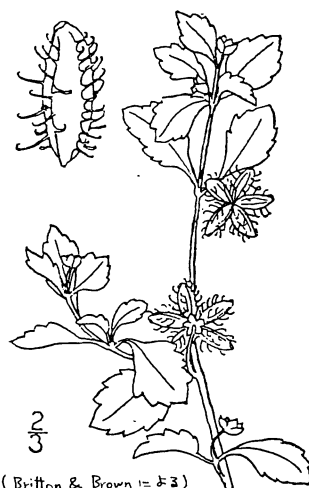
で *Clerodendron trichotomum* Thunb. f. *ferrugineum* ( Nakai ) Ohwi の学名に当てているのであろうか。大山の 箒ヶ獄の表参道 ( 登山道 ) にも毛の多い個体があるが、毛の少ない標準品との境が分明でないにも思われる。とに角、海岸のものは、確かに毛が多く異品に見える。

( 横浜市 長谷川義人 )

## アメリカトゲミギク追記

昨年 ( 1983 年 ) 本誌 No. 14 に宮ヶ瀬産新帰化植物アメリカトゲミギクについて報告した。この植物は一見フシザキソウ ( 長田武正 : 日本帰化植物図鑑 45 頁 90 図版 北隆館 1972 ) に似ているが果実の形状が異なっている。また Britton N. L. & Brown H. A. : *An illustrated Flora of the Northern United States and Canada* Vol. III p. 459 Fig. 4420 1970 に登載の *Acanthospermum australe* (Loefl.) O. Kuntze とも似ているが異なる点が多い。結局中国高等植物図鑑 第四冊 498 頁 図 6391, 1973 と中国植物志 75 卷 332 ~ 333 頁 図版 56 図 4, 1979 に収載されている *Acanthospermum australe* (L.) O. Kuntze ( 刺ほう果 ) に一致することが判った。しかし同一学名の植物がどうしてこのように形状が異なるのであろうかという疑問が残った。

その後この植物について神奈川自然誌資料 5 ( 1984 ) に執筆するにあたり大場達之先生にこの点を質したところ、初めは同じ植物でもいろいろ描き方があるからと申



されていたが、後に高橋秀男先生に国立科学博物館の標本と比較検討することを依頼して下さった。高橋先生は遂に宮ヶ瀬産のものは同博物館所蔵の *Acanthospermum hispidum* DC. ( *Prodr. Syst. Nat.*, 5, 522, 1836 ) と一致することを突き止められた。この標本はインドで採集されたものである。同先生が最初にお調べになった折にはキク科の始めの方を飛ばして調べたのでお判りにならなかったとのことである。

どうやら中国の植物学者が学名のあて違いをしていたことが判り一件落着となった。この *A. hispidum* DC. も原産地は南米で、熱帯アフリカにも分布し、北米のフロリダ、ジョージア、アラバマ各州またインドにも帰化している。 ( 茅ヶ崎市 小原 敦 )

## 藤沢調査メモ

○藤沢地区の採集追加予定植物

( FU-1 ) カヤ・イヌガヤ・クロマツ・セトガヤ・タイヌビエ・オカメザサ・ヤドリギ・シキミ・ユキノシタ・カスマグサ・アカカタバミ・ウルシ・キカシグサ・オヤブジラミ・スノキ・マメガキ・シソ・イヌホウズキ・ムラサキサギゴケ・ピロードモウズイカ・ヤمامグラ・シロバナセンダングサ

( FU-2 ) オオイタチシダ・ヒメワラビ・サンショウモ・カヤ・クロマツ・アギナシ・セトガヤ・スズメノ

チャヒキ・ヤバネオオムギ・タイヌビエ・ウシノシツペイ・チョウセンガリヤス・アシボソ・ヨシ・ミゾイチゴツナギ・メダケ・ハナニラ・カラムシ・ヤドリギ・ヤノネグサ・ヒカゲイノコジチ・クサノオウ・ノササゲ・ノアズキ・レンリソウ・ベニバナツメクサ・タチオランダゲンゲ・カスマグサ・アカカタバミ・ウルシ・イロハモミジ・ムクロジ・キカシグサ・オオマツヨイグサ・ハナウド・アケボノソウ・マルバルコウソウ・ヒメジソ・シソ・ホオズキ・アブノメ・ムラサキサギゴケ・ムシクサ・オオバナヤエムグラ・コオニタビラコ・オニノゲシ・アカミタンポポ

〔FU-3〕 ヘラシダ・ノキシノブ・サンショウモ・オオアカウキクサ・イヌマキ・クロマツ・ヤナギモ・セトガヤ・タイヌビエ・メダケ・オカメザサ・ヒメヤブラン・オニグルミ・コアカソ・ヤドリギ・ヤノネグサ・ツルドクダミ・ヒカゲイノコヅチ・オオツツラフジ・ヘビイチゴ・タチバナモドキ・ケヤブハギ・マキエハギ・ヒメハギ・イロハモミジ・ムクロジ・ホソバヒメミソハギ・キカシグサ・オオマトヨイグサ・カクレミノ・ハナウド・チドメグサ・オヤブジラミ・イチヤクソウ・アケボノソウ・ヒイラギ・マルバルコウソウ・ヒメジソ・シソ・ミゾコウジュ・ホオズキ・イヌホオズキ・アブノメ・スズメノトウガラシ・ムラサキサギゴケ・フタバムグラ・ミゾカクシ・ブタナ・センボンヤリ・ユキヨモギ・カワラヨモギ

〔EN〕 オオイタチシダ・ヒトツバ・カラムシ・イシミカワ・クルマバザクロソウ・ミミナグサ・コメツブウマゴヤシ・ミズタマソウ・ケヤキ・オオバヤシャブシ・ギンリョウソウ・ブタクサ・ビャクシン

○藤沢地区の植物で、数年来確認できず、都市化や環境変化により絶滅したとみられるもの

〔FU-1〕 クマガイソウ

〔FU-2〕 ウラジロ・クマガイソウ

〔FU-3〕 トウゲシバ・ナツノハナワラビ・クジャクシダ・デンジソウ・コウボウ・ケカモノハシ・ナガミノオニシバ・アゼナルコ・イガガヤツリ・ヌマガヤツリ・ビロードテンツキ・ウキヤガラ・サンカクイアサ・ウマノスズクサ・ケシ・スナビキソウ・ヤブデマリ・オグルマ・フシグロ・スカシユリ・ハマニガナ

○藤沢地区の植物で、仮目録にあげられているが、分布上その他のことから再検討したいもの

〔FU-1〕 レンギョウ

〔FU-2〕 アカシデ・マルバアオダモ・タチガシワ・クルマバナ・オカタツナミ・トマト・ジャガイモ・イワタバコ・キクムグラ・キク・ミヤマハハソ・エビガライチゴ

〔FU-3〕 アイバソウ・アオダモ・タチガシワ・ボダイジュ

〔EN〕 ニガクサ・ウメガサソウ・ホウライカズラチヨウジカズラ・ツクバキンモンソウ・ナガバノハエドクソウ・ナガバシャジン・イガアザミ・イズハハコハマオグルマ・カジイチゴやモミジイチゴの仲間・オオバツルマサキ

※付記 江ノ島にはこのほか文献やメモに記載されている植物が多数あります。(藤沢市 根本 平)

## 仮目録の訂正とコメント

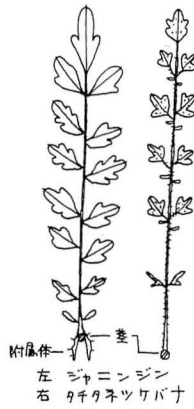
去る3月、県立博物館の御尽力で、湘南ブロックとしては4冊目の仮目録をまとめることができた。4冊目とはいっても、分類の難しいグループについてはいろいろな検討課題が残されており、はなはだ不十分なものである。しかしいつまでも「わからない」ですませる訳にもいかないで、手もとにある資料を総動員して、いくつかの植物について自分なりの整理を試みてみた。独断による誤りもあるかもしれないので、本誌上で御指摘を頂ければ幸いと思う。

(1) 誤っていたジャンジン

湘南ブロックで今までジャンジンとして整理してきた植物は、ジャンジンの特徴とされる葉のつけ根の茎を抱く付属体がなく、前から疑問が持たれていた今回、県立博物館の標本を見せて頂いて調べた結果、この植物はタチタネツケバナ (*Cardamine flexuosa* With. var. *fallax* O. E. Schulz) とするのが正しいことが判った。その時に描いたスケッチを示しておくが付属体の有無のほか、タチタネツケバナは茎、葉軸、小葉などに毛が多く、無毛のジャンジンとはその点でもはっきり異なっている。また小葉の間に小型の羽片がつくのも特徴と言えると思う。残念ながら？湘南で採集された標本はすべてこのタチタネツケバナにあたるもので、真のジャンジンは1点も見出せなかった。

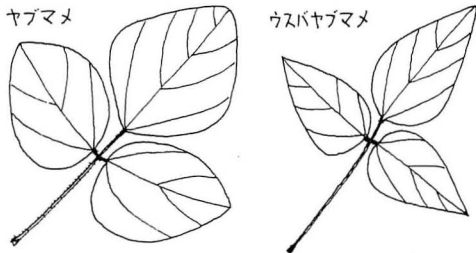
なおタチタネツケバナは  
タネツケバナとは直立する  
高い茎を持つこと、花期が  
5~6月の比較的短い時期  
に限られること、小葉が小  
さく毛が多いことなどで容  
易に区別することができ、  
私見だが単なる変種という  
よりは別種と見てよいので  
はないかとさえ思える。

訂正/ジャニンジン  
の記録をすべてタチタネツケ  
バナとする。



(2) ヤブマメとウスバヤブマメ

ヤブマメは道ばた、空地などで普通に見られる植物だ  
が、丹沢の高所に産するものは、一見してずいぶん異な  
る印象を受ける。葉は小型で小葉は細長く、特に中央の



小葉は先が長く尖った三角形になる。また茎の毛は寝て  
おり、そのため茎が平地のものより細く見える。このタ  
イプはウスバヤブマメ (var. *trisperma* (Miq.) Ohwi)  
と呼ばれているものにあたるのではないかと思う。ただ  
気になるのは大井日本植物誌に「花は鮮紫色」と書かれ  
ている点で、筆者の見た限りでは、丹沢のは平地と同じ

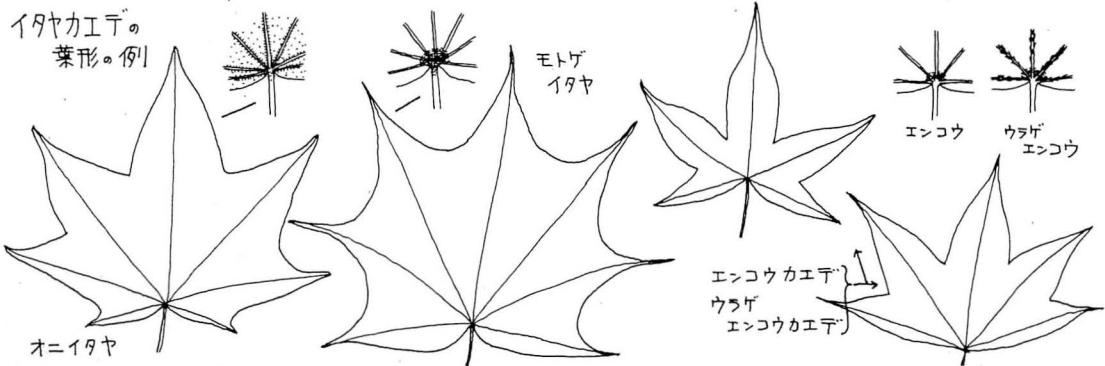
淡紫色であった。

丹沢の高所のものはすべてウスバヤブマメで今回調べ  
直したところ、大山で採集された標本もこれにあたるも  
のだった。また低地でもH I-1でウスバヤブマメと考  
えられるものが採れており、ウスバヤブマメは山地に出  
現する型なのか、林内に産する型なのか、また変種は連  
続的なのかといった点に気を配って観察する必要がある  
だろう。

訂正/ヤブマメからO Yを削除、ウスバヤブマメにO  
Yを加える。

(3) イタヤカエデ

昨年3月に、県立博物館で作成していただいた、県内  
産植物の学名リストには、イタヤカエデ (*Acer mono* Ma  
xim.) の変品種として、オニイタヤ、モトゲイタヤ、イ  
トマキイタヤ、ウラゲエンコウカエデ、エンコウカエデ、  
イタヤカエデの6つがあげられている。大井日本植物誌  
は「はなはだ変化が多く、しばしば多数の変種に区別さ  
れる」とのみ記載しているが、これらは保育社原色図鑑  
のように下記の4つに細分するのが明解で適切だと思う。  
○オニイタヤ 葉は大型(径12~15cm)で、5~7浅  
裂、基部は浅い心形。裏面全体と脈上に短い立毛がある。  
○モトゲイタヤ(イトマキイタヤ) 葉は大型(径12  
~15cm)で5~9浅裂、裂片の先は尾状に尖る。基部は  
深い心形が多い。裏面は、主脈の基部にだけ黄褐色の毛  
が密生する。  
○エンコウカエデ(狭義のイタヤカエデ) 葉は小さ  
め(径8~12cm)で5~7中~深裂。基部は切形~浅い  
心形。裏面は主脈基部。脈腋にだけ淡色の毛が生える。  
○ウラゲエンコウカエデ 葉形はエンコウカエデによ



く似る。裏面の主脈上に白色の曲がった毛が生える。

湘南ブロックの標本をこうした基準で調べ直してみたところ下記のようになり、今のところオニイタヤとモトゲイタヤは丹沢山地のみから知られている。またウラゲエンコウカエデは現在までの採集地は少ないがエンコウカエデとともに低地にも広く分布しているようである。

訂正/ウラゲエンコウカエデ…OD-3、HAT-3追加。イタヤカエデ…削除。イトマキイタヤ…削除。モトゲイタヤ…NAI、OD-3、HAT-4削除、HAT-1、ISE-1追加。

(4) カンアオイ類

内田藤吉氏らの調査によって、県西部のカンアオイ属 (*Heterotropa*) としては、カントウカンアオイ、ランヨウアオイ、タンザワカンアオイ (仮称)、ナカイカンアオイ (仮称)、オトメアオイの5つのグループがあることが明らかになった (内田・小清水1984)。

詳しい特徴は内田氏らの報文を見ていただくとして湘南ブロックの採集品をその基準で整理すると下記のようになった。

訂正/ランヨウアオイ…HAT-5削除。カントウカンアオイ…HAT-1、HAT-4削除。オトメアオイ…削除。ナカイカンアオイ…OI、NAI、HAT-4

HAT-5追加。タンザワカンアオイ…HAT-4追加。

(5) イヌツルウメモドキ

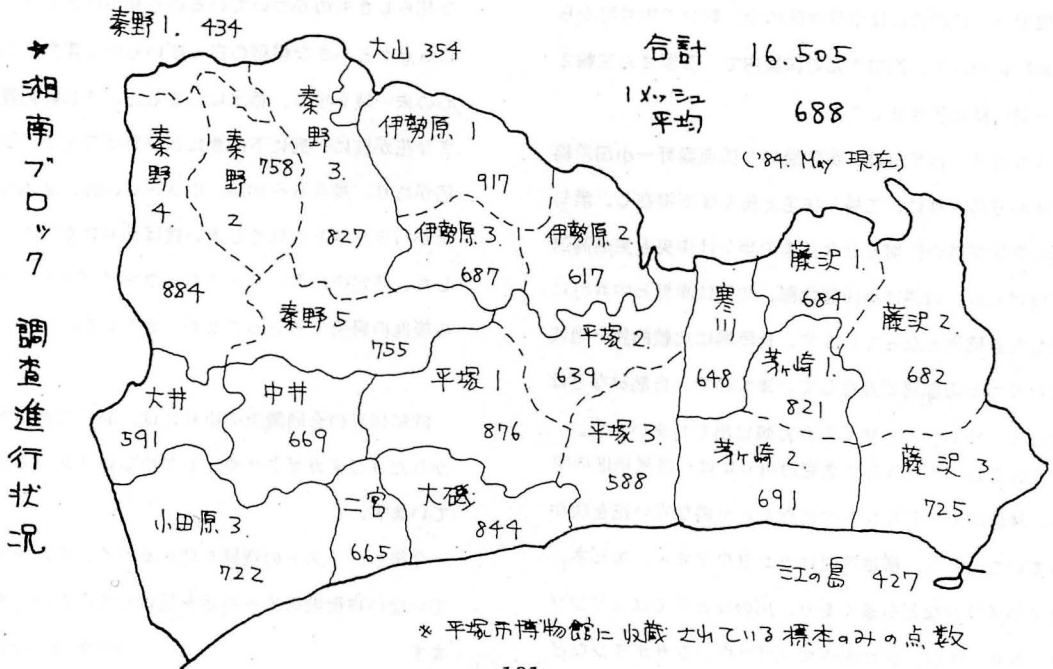
ツルウメモドキ (*Celastrus orbiculatus* Thunb.) の中で、下面の脈上に小凸起毛のあるものをイヌツルウメモドキ (var. *papillosus* (Nakai) Ohwi) という。注意するとこれはどこにでも多いもので、凸起毛の著しい個体は肉眼でも容易に見分けることができる。

湘南ブロックで採集された標本を調べてみたところ約3/1はルーペでもはっきりと凸起が認められ、イヌツルウメモドキとしてよいものであった。

訂正/ツルウメモドキ…OI、HAT-3、OY、ISE-2、ISE-3、HI-3、EN削除。イヌツルウメモドキ…NAI、OD-3、HAT-1、HAT-3、OY、ISE-2、ISE-3、HI-3、CH-2、EN追加。

(6) ヒメジャラ類

先日の仮目録では、湘南ブロックのヒメジャラ類として、ヒメジャラ、ヒコサンヒメジャラ、トウゴクヒメジャラの3つの名があがっている。このうちヒメジャラは明らかに同定ミスで、本種はやはり丹沢には産しないものらしい。



ヒコサンヒメシヤラ (*Stewartia serrata* Maxim.) の中で、下面特に中肋に毛のあるものをトウゴクヒメシヤラ (*var. sericea* Nakai) と呼んでいる。今まで収集された約10点の標本を見たところ、これらは量の多少の差こそあれ、いずれも中肋に毛を持っており、名前としてはトウゴクヒメシヤラとしておくのが適当なようである。ただ顕微鏡で見ると、中肋の毛には2通りのタイプがあり、平滑な中肋から白い伏した毛が出ているものと、中肋に小さなこぶ状の突起がありそこから茶色の斜めに立つ毛が出ているものがある。こうした違いが何か意味を持つものか、今後注意してみたい。

訂正/ヒメシヤラ・ヒコサンヒメシヤラ…ともに削除。  
トウゴクヒメシヤラ…HAT-4 追加。

以上、気づいた点をいくつか述べてきたが、まだまだゴールは遠いことを実感するこの頃である。なお仮目録

にあげられているイヌセンブリ、ハルリンドウ、ヤマトウバナは、検討の結果、同定ミスとわかったので削除していただきたい。また、ヒメハギが目録からもれてしまっているが、これはHAT-1~5、ISE-1、HI-1、NIN、CH-1、FU-1~3の12メッシュで記録されている。

湘南ブロックでは現在、標本のカードを1枚1枚コピーし、台帳にあたるカードを作る作業を進めている。た野外調査では、各メッシュの抜けている植物のリストを作り、本年度中に合計18000点(1メッシュ平均750種類)の収集を目指している。

5月現在の各メッシュの収集点数は下図の通りで、24メッシュをオールクリアした種類も約50種となった。

(平塚市 浜口哲一)

## ◆◆調査員の声◆◆

### 大井町の調査

昨年5月から大井町を担当しましたが、大体月1~2回のペースで採集を行い、新しい仮目録では、575種が記録されています。

今シーズンは、3月11、20日、4月12日、5月3日は単独で、4月26日には湘南地区の合同調査で中井町から大井町にかけて、浜口さんの御案内で、斎藤さん三輪さんと御一緒に歩きました。

大井町は、西半分は、御殿場線と国道秦野-小田原線のまわりの平地に、工場や住宅と田んぼが混在し、酒匂川の東岸が西の区切りとなり東の半分は中央を東名高速で分けられ、南側は小田原北部、北側は秦野と中井町に接した丘陵地となっています。丘陵地は比較的狭い地域にいくつかの部落が点在していますので、自然林などは少なく、少し歩くとすぐみかん畑に出てしまいます。

それでも、5月3日の調査の折りには、高尾地区の明るい林の中でフデリンドウが点々と可憐な青い花を咲かせていましたし、柳地区ではランヨウアオイ、エビネ、サイハイランなども多くあり、川のほとりではニリンソウ、クサソテツ、ジロボウエンゴサク、クサボタンなど

を見ることができました。ヤマルリソウとタチツボスミレがあちこちで群落を作っていますし赤紫色のオカスミレもかなり方々に見られます。

昨年6月の調査では、車を止めた赤田地区の川のそばに一本の大木が道に蔽いかぶさるように枝を広げ、小さな花らしきものがついているのを見つけました。道の上にも点々と小さな鐘型の白っぽいものが落ちており、苦心の末一枝を取り、標本にしました。それは釣鐘状の小さな花が枝に一列に下向きに並び葉は互生で、2cm程の柄があり、長さ6~10cm、巾3~6cm程、標本作成中に葉がパラパラと取れてしまい枝ばかりになってしまいました。同定の結果、リュウキュウマメガキとわかり、その後他の場所でも見る事ができました。

昨年10月の合同調査の折りには、前号で浜口さんの書かれたコゴメカゼクサや、トゲのないメダラも採取されています。

今後、リストの空欄を埋めるべく、未だあまり歩いていない市街地の方へも足を延ばしてみたいと思っています。  
(平塚市 山口育子)



## ヒカゲスマレを探して

4月26日、長い冬ごもりからやっと抜け出し浜口さん  
を先頭に、三輪、山口、斎藤の4名で今年度初の中井町  
・大井町の調査を行いました。

スマレ最盛期の季節でもあったので、一種でも多く見  
つけたいと願っていました。スマレの類は今までに4種  
類記録されています。

湿った敷の中で、ツボスマレ。日当たりの良い土手で  
オカスマレ、ノジスマレ。そして大収穫のヒカゲスマレ。  
その名の通り、川の流れる谷あいの日蔭で群落を見つけ  
ました。最初にこのスマレの群落に出逢った時は、花が  
なく、スマレ特有の心臓形の大型の柔らかい薄緑の葉が  
地面を覆っていました。葉脈が白く浮きでて見えました。

更に進むと、今度は山側の広い場所に、先程と同様薄  
緑の葉が一面に敷きつめられ、ポツリポツリと白い花が  
咲いていました。割に大型で、清楚な感じのする花でし  
た。今年度最初のニューフェイスです。スマレは8種に  
なりました。その場所にはかなりの広さの群落を認めま  
した。その地が荒されず、いつまでも清く咲き続けて欲  
しいと願いました。その他の種は、時期が少し早かっ  
たようで、採集予定のものもあまり収穫されず、20種に  
とどまりました。

### ○採集された植物 (NAI)

ナツノハナワラビ、トウゴクシダ、トウゲシバ、モミ、  
ヒロハウシノケグサ、ハナニラ、スダジイ、ミドリハコ  
ペ、セイヨウアブラナ、ツノミナスナ、ヨゴレネコノメ、  
イワボタン、フユイチゴ、スズメノエンドウ、オカスマ  
レ、ツボスマレ、ノジスマレ、ヒカゲスマレ、セイヨウ  
ノコギリソウ、アカミタンポポ。

(茅ヶ崎市 斎藤溢子)

### 私の見たスマレ

7年ほど前、秦野市尾尻付近で、ニオイタチツボスマ  
レ (*Viola obtusa* Makino) の群落中に地上茎に短毛が少  
々あるかないかのものがありそのスマレをよく見ると花

色はタチツボスマレ (*V. grypoceras* A. Gray) のように  
淡紫色であるが中心部は白色となっていた。また、小包  
葉は内側に重なり合い、花には弱い香りがあった。そ  
こで一部を採集して持ち帰り、浜柴助著の「原色日本の  
スマレ」(誠文堂新光社)を見てみると、ニオイタチツ  
ボスマレとタチツボスマレの雑種であるマルバタチツボ  
スマレ (*V. x obtuso-grypoceras* Makino) にあたると考  
えられた。しかし、その後自生地一帯は宅地造成され、  
このスマレは姿を消すことになってしまった。両種のス  
マレはいたる所に自生するので、いずれまたマルバタチ  
ツボスマレを見ることはできると思う。また、私の見た  
稀なスマレとしては、中井町のヒカゲスマレ、オトメス  
ミレ、大井町のナガバスマレサイシンがある。

(秦野市 小清水康夫)

### このごろ思うこと

雑木林の木々が芽をふき、木もれ日が届く林内にはス  
ミレをはじめ、春の草花が目を楽しませてくれる。“今  
年もあそこのスマレはきれいだろう。あの角のキンラン  
は、キランソウはナルコユリもそろそろ…”と心はずま  
せて散策を楽しむ季節となった。

しかし、これらどこにでもあるような草花が数を減ら  
している。宅地として、また、道路拡張ということで、  
コナラやシデの林が切り崩されると、一度に姿を消して  
しまう。“2~3年前ここにはたくさんのシュンランや  
エビネが花をつけていたのに”と思うところも少なく  
ない。

先日も近くの神社へ行ったところ、スダジイやスギの  
大木が跡形もなく切られ、そこには大きな石がうめられ  
ツツジやツゲが植えられていた。キンランやヤブラン、  
ヤブソテツやイノデなどのシダ類はどうなったのだろう  
たった2、3本の大きな木を失っただけで下草だった植  
物は大きな影響を受けてしまう。

また、河川の改修工事で河原がなくなりつつある。今ま  
でじゃまもののようにされていたアレチウリやブタクサ、  
ジュズダマやカナムグラなどが姿を消していきそして一

面芝地となった芝地のすき間に顔を出すだろうシロツメクサやヒメジョオン、ゲンノショウコやカタバミなどは除草されていくだろう。

ブルドーザーで一気に押し崩して人の思うように変えていく。その事がどれだけ多くの植物たちを死に追いやっていることか。開発するということが必要な事だけに草木が失われていくことにいっそうさみしさを感じる。

(秦野市 佐々木あや子)

### 待ちかねたデンジソウ

「いくら寒いとはいえ、命あるものはもうみんな出ているというのに…。」

という心配声が夕食時の会話に出るほど、日増しに田は春のにぎわいを見せているのに、4月24日現在、県内唯一といわれる秦野市尾尻のデンジソウは、その田にしゃがんでいくら探しまわっても、一株も見られませんでした。ノミノフスマ、スズメノテッポウ、スズメノカタビラ、コオニタビラコ、タチイヌノフグリ、カラスノエンドウはいずれも満開。タネツケバナなどは、はや盛りを過ぎようとさえしています。ヘビイチゴやミミナグサは咲き始めたところです。ハッカは5cm丈ほどに育ち群れているしヨシは15cmほどに育っています。

「もしや絶えてしまったのでは…。」と気になる理由が3つありました。1. その田が休耕をやめたため株数が一昨年より減っていたのでもしや…。2. この冬のあまりの寒さのために暖地性らしいこの種には耐えられなかったのか…。3. 最近特に、ここの田や用水路などが子供達の遊び場となり、かなり踏み荒らされたり掘り返されたりしているので、もしや…。

しかしそれでも、1. では、流れと田の間の小三角地帯は耕作されてなく、そこにも生えていたし、2. ではその空間は、ヨシなどの枯れあとがいっぱいあり、寒さよけになっていたのではないかと、3. では、用水路から離れて少し奥に入った所にも生育しているのを昨秋確認しておいたので、そちらは荒らされていないだろう…。

そういう訳で、淡い期待を持ってしばしば訪れていた

のですが、「ああ、きょうもだめだった…。」と、がっかりして帰っていたのでした。

4月27日。夕方、帰宅途中、同様の思いでいつものようにとっつきから見ていきました。なし。なし。水の中にもなし…。…。ところが、そのあと、見つけました。「あった！ついに出来ましたデンジソウ！」という感じ。3. にあたる場所に点々と、3cmに満たないほどの丈、小さな姿のデンジソウでした。この春の田への最終登場者というところなのでしょうか。気温はこの時6時で19度でした。25・26日は20度以上あったという話を聞きましたので、この暖かさでやっと姿を出したのかもしれない。

とにかく、今春、「姿を消した植物リスト」入りしないでよかったと、ほっといたしました。しかし、近い将来区画整理で埋め立てられてしまうという難問は消えていません。何とかならないのでしょうか…。

ちなみに、草木への興味関心のみで調査採集に参加した4年前、シダ類とは知らずに、花が咲いたら標本にしましょうなどと気長に待っていた、というとんな話つきの、デンジソウは私にとっては忘れられない植物のひとつです。

(秦野市 住吉静子)

### 開発進むCH-1

堤地区に茅ヶ崎では数少ない湿地がある。三方を雑木の山に囲まれ南は水田につづいている植物や昆虫が豊富なところから観察者のあいだでは茅ヶ崎の秘境と呼ばれているそうである。

ここに60年4月開校予定で小学校が建設されるというので4月25日に出かけてみた。田に沿って南側を調査したのは今年2月に来て以来2度目のことである。湿地の東半分はすでに埋め立てられ西側には一面にセリが群生していた。ここから流れ出る水路にカササゲが群生し花ざかりであった。CH-1では、近くにあったオオバタネツケバナと共に初記録。また、山すそにはヒトリシズカが咲きトリカブトも帯状に群れていた。スミレもツボスミレ、タチツボスミレ、ケマルバスミレ、アガネスミ

レ、ノジスミレが花をつけていた。1ヶ所でこれだけのスミレを見られるのは当市ではめずらしい。林では高木になったコブシ、イロハモミジ各1本を確認、これも少ない。学校用地面積は14,500m<sup>2</sup>、湿地を周囲の山の高さまで埋め立てると聞いたが、と見つけたカサスゲも今春かぎりの命だろうか。

西隣の行ヶ谷地区では、やはり60年春の開校予定で文教大学建設工事が山を切り崩し谷戸の田畑を埋めて急ピッチで進んでいる。こちらは更に広い約15万m<sup>2</sup>の用地という。うち半分の緑がイヌザクラの大木、フデリンドウの群生地などと共に消えた。

またCH-1と2を分ける大山街道に沿って新湘南国道が工事中である。巾40mの裸地に今巨大なコンクリートの橋げただけが延々と林立している。ここだけの確認種にショウブ、オグルマ、オニチヨウセンアサガオ(高橋秀男先生採集)がある。

緑が日に日に少なくなるというのが実感である。

(茅ヶ崎市 三輪徳子)

#### 心に残るCH-2の植物

##### (1) アズマツメクサ (ベンケイソウ科)

FLORA KANAGAWA NO.14で、高橋先生が水田や湿地に生える雑草で県内では珍しいものと写真と共に報告されました。それを見て1981年5月20日室田の水田で採集し、まだ未同定であった植物のことを思い出しました。同定の結果はやはりアズマツメクサでした。水田で採集したのでベンケイソウ科とはおもいもつきませんでした。古い記録だけではなくこれで茅ヶ崎にも実在していたことが判明したわけです。5月に入ると田んぼは土おこしされてしまうのでなかなか目に触れないのではないのでしょうか。

##### (2) ウリカワ (オモダカ科)

1983年9月17日、用事で出かけた帰り、少しでも草の生えている所をと思い、田の中の小道を自転車をおしながら歩きました。田のふちに見なれない白い花をつけた草。採集しようと思っても根が張っていて素手ではビク

ともしません。改めて出なおしました。この道も幾たびか通りましたが、時期を変えてこまめに歩かなくてはいけないとつくづく思いました。その植物は図鑑でウリカワとわかりました。これも稲の実りの時期で発見しにくいのかもしれません。この水田では他にヒメシソハギとミズマツバも採集出来ました。ちょっと歩きづらい所を通ったかいがあったと思いました。

##### (3) ヒメコウガイゼキショウ (イグサ科)

1979年5月12日、本村の水田で採集。この田の周辺は以前は見渡す限り水田でした。現在は1枚の田を残してすべて埋め立てられてしまいました。この1枚の水田にヒメコウガイゼキショウの運命もかかっているようです。なぜか、きれいでもないこの草が妙に気になります。

##### (4) ウンラン (ゴマノハグサ科)

1979年7月4日、茅ヶ崎海岸でウンラン採集飛砂防止用に植えられたハマニンニクと共に搬入されたものだと思います。湘南海岸でもこの地だけの様です。だいぶ広く増えていましたが、砂の移動の激しい所で、1982年頃ウンラン群落も砂排除の為出動したブルであとかたもなくなってしまいました。そのあとにはトベラが植栽されました。1984年5月久しぶりに歩くと、サイクリングロード以南にハマニンニクが5~6列にだいたい植栽されていました。それを見て、何か又新しい出会いがあるかもしれないなあ!と思いました。(茅ヶ崎市 斎木 操)

#### 風前のともし火—ハマカキラン

昭和54年、上の表題の随筆を私はスケッチ入りで某雑誌に寄稿した。その頃までは毎年初夏になると、拙宅(辻堂)から海岸通りのバス停に向かう途すがらにあるクロマツ林の道路沿いの下草の中といわず、土止めの積石の隙間、あるいはどうかすると道路上の舗装の割れ目などにまで、3本、5本ときまってハマカキランが忽然と姿を現わしたもので、現われたかと思うと先端にはもうこぼれんばかりの蕾を重そうにつけ、それが淡く緑色がかって開花したのちは果実としてかたくふくらみ、やがて盛夏を迎えると地上部はほとんど枯れてしまう、とい

った短い間の移り変りを見るのが、毎朝の通勤途上の楽しみとなっていた。

ところが休日などに付近を探してみても出現する場所はどれも極めて狭い範囲に限られているらしいことと、神奈川県植物誌（1958）を見てもすでに「激滅しつつある」と記されていること等から、この野性ランの運命が窺われ、一文を草した次第であるが、ただこの地はType locality となっていることから、生育には最適の気候風土であると思われること、地上部に現われる期間が短く、かつ根が地表から15cm以上も深い位置にあるため、自動車の排気ガス等の影響を比較的受けにくいこと、それから気品はあるが地味であるため通行人に存在を気づかれにくいこと、といった楽観的要因がないこともないので、これらを頼みの綱としていつまでも生き続けて

いくことを念じていた。しかし現実はいくつかの年ごとに出現株数が減る一方で、とうとう昨58年にはいくら探し回っても1本も見付からなくなってしまった。

ところがである。灯台下暗しというのか、なんと私の庭の片隅に、紡うかたなきハマカキランが一株生え花まで咲かしているのを草取りをしていた家内がたまたま発見。かつて近所でいくらでも採集できた時分には、何度移植を試みても悉く失敗していたのが、この期に及んで突然わが家の庭に自生してくれるとは！まさに天の授りものと大感激。ただこの分ならここかこの家の庭などに気紛れに入り込み（種子によるのか？）、人知れず根を下している可能性もあるわけで、そこで大事に保護されることを心から願わずにはられない。

（藤沢市 早川亮太）

## 調査と自然観察の間

私がフィールドへ出る時には2つの場合がある。一つは動物や植物の調査、もう一つは自然観察の案内である。調査の時は、必要に応じてどんどん採集をする。資料が命の博物館の学芸員をしていると、実物資料の収集は欠かせない仕事でもある。一方、自然観察の案内をする時参加した人に対して、採らないで見よう、採ったらまた放してやるうというルールを守ってもらい、自分自身もそのルールの中で案内をする。一人の人間が一方で採るなど言い、一方で採る仕事をしている。これは自己矛盾ではないかという批判を受けそうである。そこで、私がどんな風に問題を整理しているのか一言延べさせて頂きたいと思う。そしてそのことは、調査に関わる全ての方に、1つの姿勢としてくみとって頂きたいことでもある。

すべての出発点は自然を守りたいということである。自然保護とは何かを論じているスペースはないが、私自身は、生活環境としての身近な自然を守るという立場で、相模川河口の自然を守る会などの運動に参加してきた。そうした運動に関わっていると、世の中のムードは自然保護に傾いていても、具体的な一つ一つの問題になるとまだまだ経済優先、開発優先の力が圧倒的に強いことを思い知らされる。もっと仲間がほしい、自然の好きな

人をもっとふやしたい、そうしたことを切実に感ずるのである。

ところが一方で、自然の好きな人がふえることが、逆に自然を荒らす原因になってしまうことが少なくない。植物調査で山を歩いているとランなどが根こそぎ持ち去られている跡に出会うことがある。商売で掘る人は論外にしても、花が好きでそれを家で楽しみたいと考えた人が後のことは考えずに持ち帰ることも少なくないはずである。釣りもよい趣味には違いないのだが、まき餌で水を汚す、いらぬ魚まで殺してしまうゴミをちらかす、鳥にとって兇器になる釣糸と針を放置するなど、釣人のマナーの悪さには困ってしまう。

自然を守る声を大きくするには、自然を好きな人をふやさねばならない。しかし、採ることを通じて自然に親しむ人をふやしたのでは、逆効果になりかねない。そこで私たちが考えているのは、採らないで自然とつき合う「自然観察」をもっと広めようということなのである。鳥の声に耳を傾ける、木の芽の開いていくさまを楽しむ、花に集まる虫を観察する、こうしたことを通じて、採ることでわからないような、動物と植物が複雑なつながりを持った自然の姿に目を開くことができるのではないか、とも考えている。

ここで話が終わると簡単なのだが、実際の自然ははかりしれないほど多様で、単なる観察ではわからないこともまた多い。そこで採集も含めた調査を綿密に行い、自然に関する知識を蓄えていくことが必要なのである。そうした調査を専門家に任せるのではなく、市民が参加して行うことも、すばらしいことであろう。調査の中で採集は、いわば必要悪のようなものだが、無制限に行ってもよいものでもない。第一の条件は得られた標本や情報が、大勢の市民が利用できる形で共有されるということである。もっと小さなことで言えば、採ったものを無駄にしないということが基本的に大切だと思う。必要も

ないのに引っこ抜いたり、標本を作る途中でだめになってしまうようでは調査員失格である。採集は小さな命を奪う行為なのだという痛みを心の隅に持ち続けるようにしたいと思う。

植物誌調査に参加された方は、植物に詳しくなる得がたい体験をすることができた。望むらくは、その興味が全国の珍しい植物を採るという方向には向けてほしくない。むしろ、名前を覚えた植物の一つ一つについて、腰を落ち着けて、じっくり観察を楽しむようにして頂きたい。そうすれば、身近な所でもいろいろ発見の喜びを味わうことができるだろう。(平塚市 浜口哲一)

#### 自然を愛し70年・加藤あき植物図鑑

山北町に住む70才のおばあちゃんが花の本を書いた。本と云っても日頃身近な花に興味を持ち書きためていた絵が本となったものである。題名は「花が好き人が好き」。おばあちゃんの植物図鑑という副題までついている。

おばあちゃんが集めた花のほか知り合いから贈ってもらった花までが絵になっていて沢山の絵のうちその一部が本になったもので、観察が細かく、とても素人の絵とは思えない立派な植物画である。花の特徴はみのがさないでむしろ教えられることが多い描きかたである。よくぞここまで観察したものだとおどろくばかりである。

花にまつわる説明や経験した思い出などが花ごとに文として添えられているが、おばあちゃんの自然に対する愛着がにじみ出て読む人の心を吸いつけてしまう程の感動をおぼえるものである。

元文部大臣永井道雄さんも激賞し人の心のすさんでいる今、もう一度自然の美しさ人の心の尊さを蘇らせるこ

とを願う本として誠にふさわしいと推薦の辞を惜しまない。

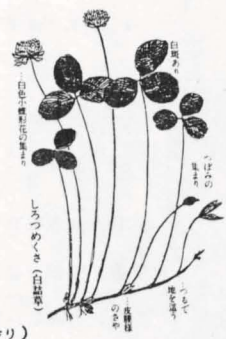
植物専門の千葉大学名誉教授沼田真さんも沢山の写生図とエッセーが一冊の本となったことはうれしい、身近な自然の血のかよったテキストとして広く推奨したいと推薦の言葉を述べておられる。

各新聞は自然を愛し70年の見出しで大きく紹介し、テレビも「70才花の人生」として30分も紹介し静かなブームとなっている。

西丹沢の一隅、丹沢湖近くに住む70才のおばあちゃんが自然をどのように見つめて過ごしてきたか一読の価値ある本と云える。

「花が好き人が好き—おばあちゃんの植物図鑑」  
講談社 ¥1800  
加藤あき

(平塚市 内田藤吉)



(本書より)

#### ☆合同調査について

昨年に引き続いて、調査の不十分なメッシュを回る合同調査を、毎月2~3回日曜日に行っています。

参加を希望される方は、事務局(県立博物館 高橋ま

たは大場)までご連絡下さい。

#### ☆会費納入について

59年度会費が未納の方は、早めに、郵便振替で御送金下さい(年2000円です)。



かながわの稀産・貴重植物 (1)

ツクバキンモンソウ

*Ajuga yezoensis* subsp. *tsukubana*

茎は数個分枝して直立し、高さ6—10 cmある。葉は3—7対が対生し、長だ円形または卵状だ円形、長さ2.2—6 cm、幅2—2.7 cm。元はしだいに狭くなって柄に移行し、先は鈍く尖り、へりは波状の鋸歯がある。ふつうは裏面は茎とともに紅紫色をおびるが、ときに表面も脈に沿って紅紫色をおびる美しい個体もある。

5月に淡い紅白色の唇形花を葉に2—6個ずつ、輪

生状に2—4段つける。花冠は5裂し、上唇は下唇より著しく小形で長さ1 mm、浅く2裂し、下唇は大形で3裂する。わずかに上唇よりやくのみが凸出する。本種は1911年、中井猛之進が茨城県筑波山で採集された標本にもとずき、ニシキゴロモの変種として植物学雑誌に発表されたものである。ニシキゴロモは主に日本海側に分布し、花冠の上唇はやや長く深く2裂し、長さ2.5—3 mmある。この写真は吉川アサ子・平松俊子両氏のご案内で、保戸ヶ谷区の雑木林で撮影した。ほかに県内にも分布は知られているが、最近は著しく減少している  
(高橋秀男)

仮目録について

神奈川県植物誌仮目録は 県央 湘南 県北 三浦 横浜・川崎 県西 の6分冊として印刷しました。総会の折にお渡ししたほか、当日欠席のかたには後日郵送いたしました。もしお手元に届いていないかたは事務局までお知らせください。なお残部がありますので必要なかたは事務局までお申し込みください。野帳がわりにおつかいくださっても結構です。

大変遅くなりましたが16号をおとどけいたします。本号は湘南ブロックに編集をお願いいたしました。浜口さんから素晴らしいレイアウトを頂いたのですが、ワープロの機種をかえたために行や字の間隔が違ってしまい、折角のレイアウトが生かせませんでした。おわびもうしあげます。次号は県央地区をお願いします。  
(事務局)